

上ヶ原狐（うえんばらぎつね）

むかし大朝の九門明くもんみょう じんべいに甚平さんというおじいさんが、おばあさんと一緒に住んでおりました。

甚平さんの家の横では水車がゴットン、ゴットンと回っています。向こうの森の木立の中では小鳥がさえずっています。この森を村人は、上ヶ原と呼んでいました。

おじいさんもおばあさんも正直者の親切な人でした。その土地が大好きで、いつもニコニコして家のまわりの田や畑でお米や野菜を作って暮らしていました。



ある晩のことです。

おばあさんは誰かを呼ぶ悲しそうな声に目をさました。

「おじいさん、おじいさん。なんやら外の方で悲しそうな鳴き声が聞こえやしませんか」とおじいさんを起こしました。二人でじっと聞き耳みを立てておりますと、確かにキャン、キャンともの悲しい声がします。

「おばあさん、どうしようかのう」

「外へ出てみましょうや」

二人はこっそりと起きて、そろりと雨戸を開けました。



外は明るい月夜です。

おじいさんとおばあさんが目を凝らすと、何か丸いものがうずくまっているではありませんか。

「何でしょうかのう、ありゃあ」二人は、ゆっくり、ゆっくり近づいてみました。

なんと、それはまだ生まれたばかりのメス狐でした。

「おじいさん、大変じゃ。足が折れて血が出ていますよ」

「おうおう。それはかわいそうじゃ、早く家の中に入れて手当てをしてやろう」



一夜が明けました。おじいさんとおばあさんが、ゆうべ一生懸命に手当てをしたおかげで、子狐は今朝はだいぶ元気になりました。

子狐は時々細い目を開けておじいさんとおばあさんを見て、小さい声でクンクンと鳴いています。

「まあ、なんとかわいい子狐でしょう」

それから二人は、子狐に娘の子らしいオサンという名前をつけて毎日、かいがいしく世話をしました。



オサンは日一日と元気になってゆきました。

そうしておじいさんやおばあさんの後をチョコチョコとついて歩きまわるくらいになりました。子供のいないおじいさんとおばあさんにとって、子狐は我が子のように思えてきました。

「オサンや、おまえの好きな小豆飯あずきめしを食べて早よう元気になれや」

「オサンや、お寿司を作ったからお食べ」

一方オサンの方も、おじいさんやおばあさんに頭をこすりつけて、本当の子どものようになつていました。



半年ほど過ぎた日のことです。

オサンはすっかりなつています。

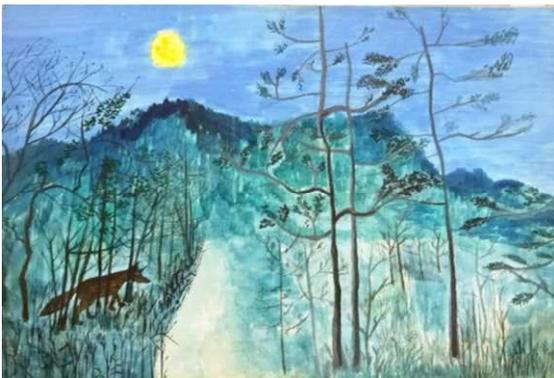
おじいさんとおばあさんは、悩んでいました。

このままずっとオサンを手元で育てたいのですが、傷もすっかり治ったことですし、上ヶ原にはきっと親狐も待っていることだろうと、二人は泣く泣くオサンを上ヶ原に返すことに決めました。

ある夜、雨戸を開け放し「さあ、お母さんの所へお帰り。もう二度とけがをするんじゃないよ」と外に出してやりました。

オサンは一瞬びっくりした様子で、しばらく庭にたたずみ、おじいさんとおばあさんをじっと見つめていましたが、やがて二人の気持ちを理解したのか、上ヶ原を目ざして一目散に走っていきました。

明るく照らす月の光の中を、山の中に姿を消していくオサンを、二人はいつまでもいつまでも見送っていました。



その次の日の朝のことです。

おばあさんが雨戸を開けますと、縁側に山鳥がおいてありました。

「おじいさん、山鳥がありますよ」

「おお、大きな山鳥だのう」

と、その時、近くの山の中でコーン、コーンと二声、狐の声がしました。

たぶん子狐を助けてもらい、元気にして返してもらったお礼に親狐がくれたのだらうと思いました。

そんなことは、その後もたびたびありました。あるときは、山鳥でしたが、あるときは茸で、またあるときは栗でした。



それから何年かの年月が経ちました。

ある夏のむし暑い晩のことです。上ヶ原の方からひとつひとつ、ポッポッと火の玉が増えていきます。

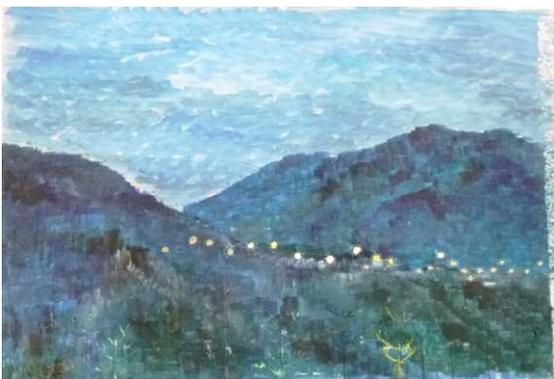
それが高くなり、低くなり、ゆっくりゆっくりと川下の方へ移っていきます。声もなく、音もなく、消えたり、ついたり、二~三十の提灯ちょうちんの火がゆらめいています。蛍のように淡い灯りあわひかです。これは昔から狐の嫁入りといわれているものです。

「おじいさん、おじいさん。オサンですよ、きっとオサンが結婚したのですよ」

「そうじゃ、それに違いない。オサンが、嫁入りしたことを私たちに知らせてくれているんじゃ」

「そうですよ。本当によかったですね」

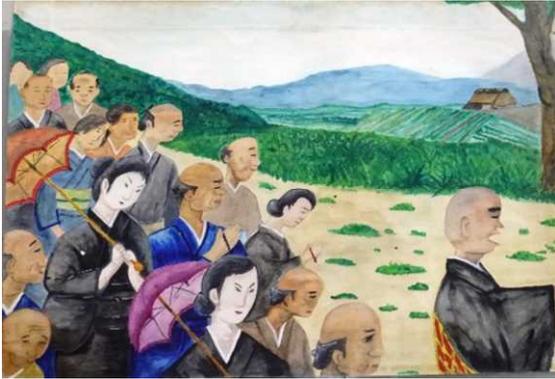
おじいさんとおばあさんは手を取り合って喜び合いました。



それからまた何年かの月日が静かに流れてゆきました。甚平さんも年老いて、やがて亡くなってしまいました。

甚平さんの葬儀しやうぎの日のことです。大勢の参列者の中に、誰も知らない女の親子連れしやうこうが焼香しやうこうに来ました。あまり姿形すがたかたちを見られたくないのか、二人とも傘を深くさして、人々の目から隠れるようにしてたずんでいます。

「この辺では見たこともない人だが、いったいだれだろう」と村人はひそひそと噂話をしました。



村人の一人が二人に近づき、「失礼ですが、どちら様でしょうか？」と尋ねました。二人はびっくりしたように後ずさりしましたが、やがて意を決したかのように母親らしき人が言いました。

「私はオサンといいます。そして、これは私の娘です。昔、甚平さんとおばあさんに大変にお世話になったものです。おじいさんと最後のお別れをしに来ました。」

さらに詳しく聞こうとする村人をさえぎり、

「おばあさんに、どうぞよろしくお伝えください」

と、それだけいうと、二人はくるりと向きを変え、逃げるように上ヶ原方向へ立ち去っていききました。

「はて、オサンで、いったい誰だろう？」

見送った村人は頭をかしげるばかりで、誰も心当たりがありません。

残されたおばあさんはすっかり力を落としていましたが、後でその話を聞いてびっくりし、

「オサンだ。オサンが娘を連れておじいさんの葬式に来てくれたんだ。」

と、上ヶ原方面を見ながら涙を流したということです。



イラスト：おおあさ町みんなの会